

アーカイブを活用した映像研究と教育の可能性

伊藤 守 (早稲田大学)

1. 日本における映像アーカイブの現状

今回はじめて池田記念美術館に参りまして、館内の展示を見学しました。明治初期の六日町で撮影された今成家の写真や、戦前から戦後にかけての魚沼地域の風景や人々の生活を記録した映像や写真を拝見して、大変心を動かされました。また、この美術館も、八海山を臨むすばらしい空間に位置して、とてもよい美術館です。

こうした空間にはちょっと相応しくない、無粋な話になるかもしれませんが、私からは「アーカイブを活用した映像研究と教育の可能性」というタイトルでお話いたします。

さて、池田美術館は新潟大学地域映像アーカイブセンターと共同で、今回のような企画を立てて、イベントや講演会を行っておられるわけですが、アーカイブとは元々、公文書や古文書を保管すること、保管する所、を意味しています。東京には国立の公文書館がありますが、これはまさに日本のアーカイブのセンターといえます。古文書、議会の議事録や会議録などの公文書、あるいは公人の手記などを、文化的に重要な価値をもつものとして収集、保管、公開してきたということです。また、納本制度によって、国立国会図書館は日本で刊行されたすべての雑誌や書籍を収集・保管・公開しています。図書館も文字や印刷・出版物を収集・保管・公開するアーカイブ機関です。

映像アーカイブ設立の機運

ところで、映像に関しては、この15年ほどの間ででしょうか、ようやくその文化的な価値が認識され、写真や映画そしてテレビ番組といった映像を収集し、保管しようという動きが出てきました。映像アーカイブの重要性がようやく認識されはじめたということでしょう。東京国立近代美術館のフィルムセンターは主に映画の収集と保管を担っていますが、印刷物と比較して、なぜ映像の収集・保管が遅れたのか。いくつか理由があると思います。第一は、映像がもつ資料的な、そして歴

史的な価値にかんする認識がなかなか高まらなかったことが大きいと感じます。有名な写真家の作品などは写真集として出版され、あるいは商業的に成功した映画などはかなりの程度保管されています。しかし、その地域の風物や生活を丹念に記録した写真や映画は体系的に保存されることもなく、埋もれたままであったといえます。その意味でも、この美術館で展示されている一連の写真や記録映画はきわめて貴重な文化的な作品であり、資料です。

映画に関して言えば、さきほど述べたように、商業的に成功した映画などはかなりの程度保管されていますが、戦後、映画製作において大きな市場を占めていた記録映画は体系的な収

集・保管が行われないまま今日に至っている、というのが現状です。そのため、フィルムの劣化が進み、いま保管しなければ、永遠にその映像にふれることができない状態になっている。たとえば、大手の建設会社や電力会社さらに地方の自治体が資金の提供者となり、戦後の近代化の過程で全国各地で

行われたダム建設、トンネル工事、あるいは原子力発電所の建設などの様子を記録した、数多くの記録映画やPR映画が製作されたわけです。

こうした映画が、現在、制作会社に4万本、企画会社に1万本、自治体に2万本、現像所に5万本、個人に1万本、保存されていると言われていています。まあ、保存されていると言いましたが、正確に言えば「放置」されている。そこでようやく保存に向けた動きが生まれつつある。たとえば、東京大学や東京藝術大学が中心となり、記録映画保存センターや東京国立近代美術館フィルムセンターと連携・協力するかたちで、記録映画アーカイブ・プロジェクトが始まっています。そこでは、戦後、3000本近い数の記録映画を製作した岩波映画の保存と作品の検証なども行われています。

こうした動きを後押ししているのは、もちろんデジタル技術の進展です。劣化しつつあるフィルムをデジタル化して、再生することが比較的容易に行われるようになったからです。

20世紀はまさに「映像の世紀」でした。時代を記録し、さまざまな地域とそこに生きる人々の変化を記録してきた映像を、後世の人々に遺し、伝えていきたいものです。

テレビ番組アーカイブ

では、テレビ番組に関してはどうでしょうか。これも、諸外国と比較すれば、大きく立ち遅れていると言わざるをえません。

NHKは1980年代後半から本格的に番組の保存に努めてきました。また、それ以前のフィルムやテープの状態で保管されてきた番組を時代を遡って、遡及的にデジタル化する作業をおこない、今年ほぼそれが完了します。現在、NHKアーカイブスには、約64万7000本の番組、196万8000本のニュース項目、104万2000本の番組台本が保存されています。そして、これらの映像作品や資料がすべて研究者に公開される、というところまでできています。しかし、まだまだ一般の市民に公開されるというところまでには至っていない。インターネットを通じてNHKアーカイブスに保存された番組の一部や「見逃し番組」を無料で、あるいは有料で見ることができますが、その数は限られていますよね……。視聴できるのは約8000本くらいでしょうか。

また、民放では、こうした動きは見られません。ドラマや高視聴率のバラエティ番組はDVDといった形式でパッケージ化され、レンタルあるいは購入して繰り返し視聴可能ですが、ドキュメンタリー番組やニュース・報道番組は一回放送されてしまえば、個人が録画していないかぎり、見ることはできません。もちろん、自社で放送した番組は収録して保存しているはずですが、それがどのように整理されているか、私たちはまったく分からない。民放はいま経営的にも厳しい状況にありますから、こうした側面に予算を振る分ける余裕がないということもあるでしょう。

いずれにしても、放送資料の「法定納入」が義務づけられているフランスや、ブリティッシュ・フィルム・センターで番組の保存を行っているイギリスと比べて、日本のテレビ番組の収集・保存は遅れているということです。

記録映画そしてテレビ番組の保存はなぜ重要なのでしょうか。それは、一言でいえば、その時代を記録した重要な映像資料となるからです。文字や印刷物では伝えきれないリアルな事物を映像は伝えることができるからです。100年後あるいは200年後、さらに500年後の人々が、そうした映像を観るとき、何を想像し、何を考えることになるのでしょうか。そんなことを想像すると「わくわく」しますよね。

いま、国立国会図書館が民放やNHKのすべての番組を収録して保存する計画が国会で議論されていますが、私は、ニュースやドキュメンタリー番組に限らず、ドラマもバラエティ番組も含めて、そして地方の放送局が制作した番組も含めて、すべてのテレビ映像が保管されるべきだ、と主張しています。

それらはすべて、20世紀という時代がどんな時代だったかを映し出す「文化」だからです……。

20世紀はまさに「映像の世紀」でした。時代を記録し、さまざまな地域とそこに生きる人々の変化を記録してきた映像を、後世の人々に遺し、伝えていきたいものです。

2. 映像アーカイブをいかに生かすのか

～大学教育に映像アーカイブを活用する

ところで、アーカイブは映像を収集・保存する所ですが、収集・保存された映像をどう活用するか、どう活かしていくのか、これがもっとも重要なこととなります。ただ単に「保存」していても意味がありません。活用すること、公開して再利用すること、これが大事です。

ただ、重要であるとはいえ、利用する、公開して活用すること、これが実はもっともやっかいなことからなっています。放送開始から長い期間、テレビ番組は「流れる (flow)」もので、一瞬で消えていくもの、と考えられていました。ですから、録画する、保存する、ということは想定されておらず、実際に初期のテレビでは技術的に保存することは難しかったと言えます。したがって、初期の番組はその多くが保存されていない。先に述べましたが、また保存する価値があるという意識も希薄だったでしょう。それが、録画機が普及しはじめた80年代に入り、本格的に保存するようになった。しかし、その時の保存の目的は、新たな番組を制作する際に自社の過去の映像の一部を挿入する、再利用する、というものでした。つまり、過去に制作された番組を放送以外で利用する、ということは想定されておらず、そのための著作権処理もなされていなかった、ということです。

いまインターネットを通じて再視聴できる番組は、その番組で使われた音楽の著作権、出演した人物からの許諾、すでに亡くなった場合はその遺族からの許諾等、こうした著作権処理をあらためておこなったものです。インターネットによる番組公開、これらはすべて関係者・関係機関からの許諾をえて、はじめて可能となる。そのためには、多額の費用を要しています。著作権に掛る費用が、公開する場合の大きな壁になっている。ちなみに、美術館で収蔵している絵画などの作品も同様です。デジタル化して館内でスクリーンで映像として見せる場合には、関係者からの許諾が必要です。

このように映像アーカイブを活用するためには、いくつかのハードルを乗り越える必要があるわけですが、これからお話ししたいのは、映像を大学教育に活用した実験的なプロジェクトです。



▶ e-テキスト教材で大学教育を～実験的試み

これまでも、学校教育のなかで、映像を活用することは行われてきました。小学校では教育テレビの各学年の教科に合わせた番組を授業で見る、といったこともなされてきましたし、教師が自身で録画した映像を教材として活用するといったことも一般的に行われてきたと言えます。大学教育でも、教員が録画した番組の一部を使って、教育に活かすことを行ってきたわけです。しかし、それは、テープやDVDという媒体で、教室で番組なり映像を学生に見せる、というかたちをとらざるをえなかった。

早稲田大学で2012年に行った実験的プロジェクトは、そうした方法を刷新して、学生が、いつでも、どこでも、自身のパソコンがあれば、教員が選定した番組を見ることができる教材=e-テキスト教材を開発したところに新しさがあります。

具体的にお話ししましょう。

このプロジェクトは、NHK放送文化研究所の全面的な協力のもとで行われました。研究所の「高等教育に番組を活かす方法」にかんする調査研究の一環として行われたということです。

一方で、これを活用した早稲田大学、具体的には私の担当科目である教育学部開講科目「広報関係論Ⅱ」では、後期のテーマを「沖縄現代史」として設定し、戦後の沖縄を記録したNHKのドキュメンタリー番組を活用して15回の講義を設計しました。

放送文化研究所は、このプロジェクトのために新規にサーバーを立ち上げました。研究所の研究者と、この講座をリレー方式で担当した複数の教員が協議して、沖縄関連の番組を選定しました。そのうえで、NHK側が著作権処理を行い、学生が自身のパソコンでパスワードとアカウントを入力すれば、サーバーに格納された番組を、いつでも、どこでも、視聴できるe-テキストシステムを構成したわけです。使用した番組は、沖縄関連の膨大な番組の中から、学生にぜひ見せたい優れ

た31本の作品です。

著作権処理は前述したように大変な作業となります。今回は担当者がわざわざ沖縄まで出向いて、番組に関連する方々から許諾を得る作業をしていただきました。

e-テキストシステムの優れた点

このシステムの優れている点は、学生が事前視聴、事後視聴ができることです。繰り返し視聴できる。これが学生にとってはかなりハードルが高い。2本の番組を見るとして、最低でも2時間、しっかり見る。1回視聴しただけではよくわからない、そうすると2回、3回、と見る必要がある。

通常テレビを見るという経験は、リビングで家族で見る、自分の部屋で一人で見るといった経験です。番組はあくまで「流れて(follow)」いくものですから、注視して見るということはない。番組がどう構成されているか、どのような工夫がなされているか、ほとんど気にしないで見るわけです。

こうした日常のテレビ番組とのかかわりを見つめ直し、しっかり思考する対象として番組を位置づけるために、このプロジェクトでは、2つの課題を設定しました。第1は、もちろん、映像を通じて沖縄現代史を学ぶ、ということです。戦後の沖縄の歴史を学ぶということです。それと共に、第2は、戦後の沖縄をカメラはどう記録したか。映像を、つき離して、対象化しながら観ること、カメラが捉え、編集された映像のフレームがもつ歴史的な意味、言い換えれば映像の歴史性を考えることでした。

そのことを私は、報告書で、「記録された〈現実〉」から学ぶ、そして「記録するという〈現実〉」から学ぶ、と記述しました。なかなか難しいことですが、この二つの側面を同時に学んでほしかったわけです。つまり、事前に何度も番組を注視し、講義で映像の構成や演出の方法を学ぶ、そのことを通じて、「テレビの見方が変わる」、「テレビの見方を変える」、その経験を学生に求めたわけです。学生にとっては、かなり

NHK放送文化研究所 2013年 春の研究発表とシンポジウム

学生用トップページ

件数: 15 件

No.	実施日	議題	担当講師	視聴情報	視聴
1	2012年 10月22日	アーカイブ活用	伊藤 守	★事前視聴番組 E TV特集「アレビが死つた沖縄 -アーカイブ映像からとどる本土復帰40年」(2012年、89分)	
2	2012年 10月10日	沖縄現代史勉強	田中 康雄	★事前視聴番組 長老の戦争 山田徳心と150人の一頁 (1984年、45分) ※参考番組 ・日本の運命「琉球の島・沖縄」(1959年、41分) ・ドキュメンタリー「太平洋からの帰還者-沖縄-先住73」(1973年、29分)	
3	2012年 10月17日	沖縄戦の記憶(1) 「残照集」-本土からの語り	七戸 真	★事前視聴番組 特撮ドキュメンタリー「沖縄の戦雲」(1969年、60分) ※参考番組 ・NHK伝記映画「沖縄」(1956年、20分)	

クリックすると
視聴画面へ

視聴画面



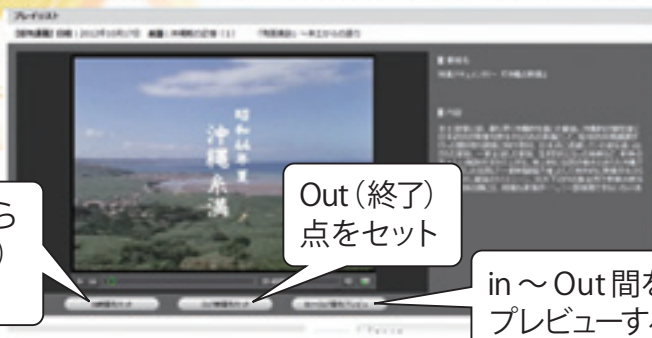
クリックすると
大画面に

学生が事前視聴の
感想を入力する

視聴番組の
サマリー

NHK放送文化研究所 2013年 春の研究発表とシンポジウム

講師用プレイリスト (授業で使用する部分を簡単に切り出せる)



再生しながら
in(スタート)
点をセット

Out(終了)
点をセット

in~Out間を
プレビューする

講師は学生の事前感想を
授業前に閲覧できる



学生感想一覧

【授業議題】 議題: 2012年10月17日 議題: 沖縄戦の記憶(1) 「残照集」-本土からの語り

件数: 40 件

学生ID	内容	講師文
	沖縄戦で、島内をこくしたり被害にあつたりしている沖縄人。しかし、戦後、経済的に豊かで、アメリカの支配下である沖縄で暮らしているには、本島よりそう生活になる。それは、基地周辺の経済効果で豊かになる。沖縄島の地理などである。沖縄人は沖縄した気持ちを「地方いり」という言葉にかえてやり過ごしている。それに反して、本土の日本の経済が伸びていこう。戦争中、戦後、沖縄島の半島経済は沖縄で立ち上がるのだった。そして、その痛みを思い出すからいこう。沖縄の島内文化を賛賞して、戦後地化した見がする。本土に暮らしている私も、沖縄の痛みを知ろうとしていこう。	
	当時の沖縄の人々が戦時中に経験したアメリカと共存することによって生活が豊かになることができていた。戦時下の沖縄でも、また戦後経済によって、本土と同等の生活が送れることについて、軍に本土の犠牲になつた人たちの記憶から本土との関係に戸惑いながら生きていくことが求められ、犠牲になつた人たちは戦時中ここで戦死するのだから、感謝されるなどの気持ちで死んでいったのではなく、本心でなく仕方なく死んでいったことが感じられた人たちの話、戦時からいこう。それからいこう。戦時中の沖縄は戦時中が戦時中だったとしても、沖縄が本土復帰した後もいこう。	

▶ しんどい作業だったと思います。

第2の優れた点は、教員が事前に映像を編集することができるという点です。そのために、講義中に必要な箇所だけを学生に見せて、映像視聴と解説を同時に行うことができる。これまでであれば、番組の全体を学生に見せるか、講義中に必要な箇所を探して映像を見せるか、どちらかの作業を行う必要があったわけですが、すでに学生が事前に映像を見ていることが前提なので、それが無くなり、スムーズに、効率的に、映像視聴の時間と解説の時間をコントロールできるということです。

実際にこのシステムを活用した効果はどうだったか。学生のアンケートから、彼らの声をいくつか拾っておきましょう。

e-テキストシステムを使った教育上の効果

まず、沖縄現代史についての理解が高まったかどうか、に関してです。

- ・ 圧倒的に沖縄に関する知識が増えた
- ・ 文字上の沖縄ではなく、人としての沖縄の歴史を知った
- ・ 沖縄のことを「自分とは関係のない場所」と思ってきたが、そうではなくなった
- ・ 自分が生まれる前の沖縄の様子を映像で知ることができて印象が変わった

こうした意見から理解できるように、沖縄戦や占領下の沖縄の事実に「初めて知った」「衝撃を受けた」という記述が多く、番組映像がもつ強い喚起力、影響力がうかがわれると思います。

また、映像を使った講義についての意見です。

- ・ 正直ドキュメンタリーの類は苦手なジャンルだった。まさに現代人の「思考停止」になっていたので、この授業によって「考える」時間が増えた
- ・ テレビ番組といえば娯楽であった。しかしこの授業でドキュメンタリーは学術的な資料になるという認識が変わった
- ・ 複数のドキュメンタリー番組を一つのテーマで見ると新たな見地をえられる

- ・ ドキュメンタリーは、見せ方、見方で、こんなにも印象が異なることに驚いた

学生の発言を見ると、数ヶ月間、半ば半強制的に番組を読み解く経験をしたことで、「考える材料になった」「学術的資料になる」といった、これまで期待していなかった番組の機能を認識していることが分かるでしょう。また、カメラの位置や映像の編集や構成で、「見え方」を操作できることなど、これまでの視聴では気づかなかった側面に面白みや関心を感じられるようになったことも、彼らの記述から理解できます。

3. 小中高の教育に活かし、地域で映像アーカイブを育てる

以上の取り組みは、高等教育、大学の教育に映像資料を活

かしていくための実験的な試みでした。初年度の2012年は、いまお話しした早稲田大学における「沖縄現代史講義」、2013年度は記録した映像を用いた法政大学の「水俣病講義」、そして2014年には東京大学で「東京イメージ講座」が開講しています。

さて、映像アーカイブを教育に活かす試みは、大学だけでなく、小中学校や高校、そして

地域でも行えるでしょう。それぞれの教育段階に応じて、生徒が日々生きる地域社会の歴史や風土を映像で学ぶことは、地域への愛着や地域アイデンティティの形成に役立つだけでなく、いま生きている世界の現実を相対化し、未来を想像する力になるかもしれません。

また、地域を基盤にした映像アーカイブが美術館や博物館や大学の連携の下に各地に設立され、さらにそうした複数のアーカイブ機関がネットワーク化され、映像の交換がなされるならば、自分たちの地域を特別視したり、特権化するのではなく、それぞれの地域が他の地域との相互交流から成り立ってきたこと、そしてその交流こそが地域の特徴を織りなしてきたことがよりよく理解されるのではないのでしょうか。

そうした希望を抱きながら、映像アーカイブの可能性を考えていきたいと思っているところです。ご清聴ありがとうございました。 ■